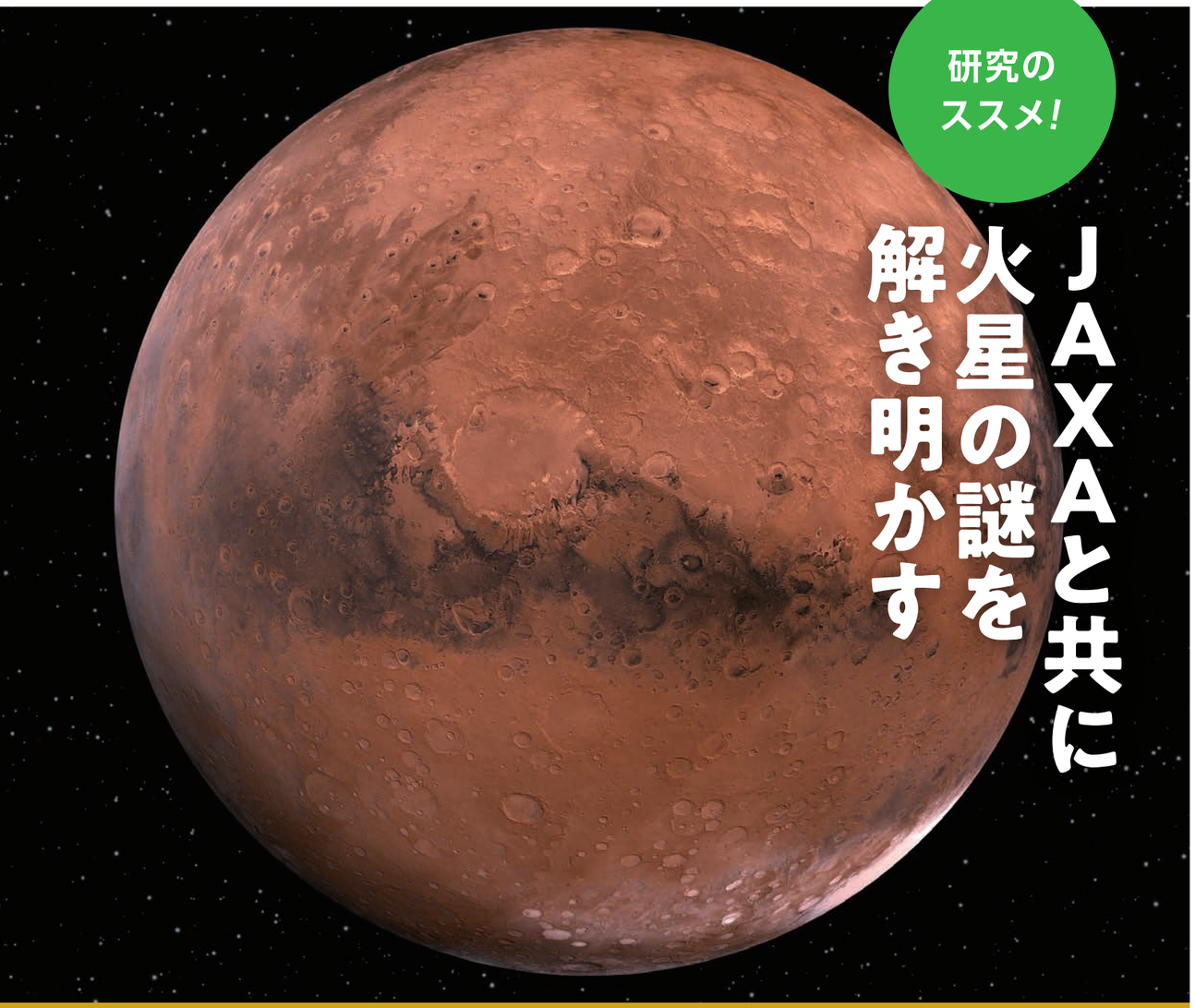
高知大学マガジン SRU Vol.12

学びと、人と、地域をつなぐ。

2026 Autumn/Winter

Super Regional University

SRU(Super Regional University)=地域で学び地域のあらゆる人々に学びの場を提供するとともに、世界標準の研究力によって地域と世界を繋ぎ、地域と世界を変えることのできる大学



研究のススメ!

JAXAと共に火星の謎を解き明かす

Contents

【研究のススメ!】
地域の物語を“かたち”にする彫刻研究とデジタルが拓く新しい表現と教育

【HELLO!SENPAI】
地域協働学部での学びと経験を活かし住民に寄り添う

【カケル大学】
よさこい高知文化祭×高知大学

【ピックアップ高知大学生】
高知大学サッカー部
総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント出場4年ぶり、全国へ

Kochi University TOPICS

高知大学 Kochi University

TAKE FREE

Information

もっと高知大学を知るために!

リニューアルした高知大学ホームページ



リニューアルしたHPはこちらから

高知大学の魅力を伝える公式PV公開中!



●動画で見る高知大学

「YouTube」・「夢ナビ」で学科紹介や講義動画を視聴できます。



●デジタルパンフレット

大学のパンフレットや各学部のパンフレットを閲覧できます。



公式SNSで情報発信中!

イベントの情報やキャンパスライフなどをご紹介!学生広報スタッフによる投稿もあります。

高知大学のラジオコーナー

放送中

FM 高知　81.6MHz　【毎月】
「Monthly 高知大学」　第4金曜日10時15分～

高知大学の教育・研究・地域貢献等の情報をFM高知でお届けしています。ラジオ聴取用アプリ「**radiko**」をダウンロードしていただくと、スマホやパソコンで全国どこででも視聴していただけます。

YouTubeで配信中!



高知大学たんねる舎 ～いつまでも学びたい、を応援するラジオ～

YouTube、Podcastで配信中!

この番組は、いつでもどこでも、いつまでも楽しく学び続けていきたい皆さんを応援します。「たんねる」は幡多弁（土佐弁）で、「調べる」、「探究する」、「訪れる」という意味。「たんねる舎」は、「知を探究し、知を訪れる学びの場」という想いが込められています。

高知大学 たんねる舎 いつまでも学びたい、を応援するラジオ。

「高知大学マガジンSRU」アンケートご協力のお願い



アンケートにご協力いただいた方の中から**抽選で3名の方に高知大学オリジナルグッズをプレゼントします。**

（当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます）

回答期限：
令和9年3月31日

※画像はイメージです。

こちらをチェック▶

高知大学みらい基金へのご支援をお願いします。

あなたの「共感」は、私たちの「みらい」を変えられる。

高知大学みらい基金は、学生団体や研究者・研究プロジェクトごとに募金ページを設け、「どんな挑戦を応援したいか」を寄付者ご自身にお選びいただける基金です。それぞれの団体から活動の様子や成果をお届けすることで、「寄付してよかった」と実感していただけることを目指しています。高知大学の“みらい”をともに支える一歩として、あたたかいご支援をお願い申し上げます。



◀詳しくはこちらから

高知大学 Kochi University

高知大学広報・校友課　2026年10月発行

〒780-8520 高知市曙町2-5-1

TEL：088-844-8967

FAX：088-844-8033

E-MAIL：kh13@kochi-u.ac.jp

広報誌SRU バックナンバーはこちら

※誌面の学年と役職は制作時のものです。



高知大学
研究のススメ！
高知大学の研究の「今」をご紹介します。
vol.23

JAXAと共に火星の謎を解き明かす

研究に取り組むうちに、その対象が「地球」から「宇宙」へと広がった理工学部の長谷川精准教授。将来の有人火星探査を見据え、JAXAと手を携えて、火星の謎を解き明かす研究に取り組んでいます。

モンゴルでの古気候学の調査が惑星の研究につながった

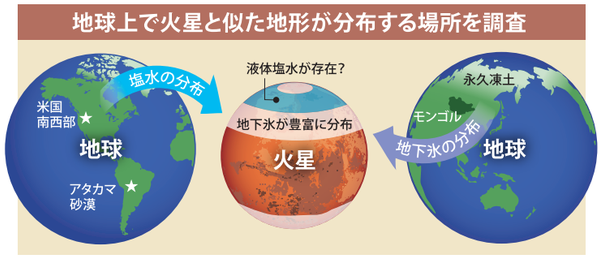
「新しくて面白い研究」をするのがモットーだという長谷川精先生。恐竜に興味があり、研究者となってからは、地球の過去の気候変動を調べる古気候学を専門としました。あるとき、恐竜時代の気候をモンゴルの砂漠で調査し、その成果を学会で発表。「ある惑星科学者の方から、火星にも砂漠や砂丘はあるのでやってみませんか、と勧められたんですよ。その言葉を受けて、惑星に関する研究も始めました」と振り返ります。

ただ、その後も研究の中心は地球の気候変動。そうしたなか、火星にも存在するコンクリーション（球状の小さな物質）について、米国とモンゴルで共同研究。炭酸カルシウムが酸性の地下水に触れて中和し、その過程で鉄分が表面に付着してできると発表したところ、火星での形成過程を解き明かすものだと注目されました。この研究が多数の惑星科学者の目に留まり、2020年頃から、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の探査に加わって、本格的に惑星の研究に取り組むようになりました。

火星の有人探査に活かせる地下氷の場所を特定

惑星のなかでも、長谷川先生の主な研究対象は火星。地球だけでなく、火星にも生命が存在した（する）のかどうかという点に強く興味をひかれています。現在の火星の平均気温はマイナス60℃ほどで、大気は地球の100分の1ほど。いわゆる〝火星人〟が生存するのは不可能ですが「火星の表面を見ると、川やデルタ（三角州）のような流水を示す地形があるんですよ」と長谷川先生。これは「現在の火星の表面には水がないけれど、昔は大規模な水環境があったこと」を意味するのです。大規模な水環境があったとすれば、生命が存在した可能性があると期待されます。

この、太古の火星の生命痕跡を探すため、米国航空宇宙局（NASA）をはじめとして多数の着陸探査が行われてきました。さらに2040年代には、有人火星探査も計画されています。JAXAでも、独自の火星着陸探査の計画が始まり、地質学的な視点での着陸候補地の選定が長谷川先生に求められました。そこで最初に行ったのは、現在の火星の地下に氷が存在する場所の探索です。実は、地球の永久凍土のように、火星の地下には今も氷があることが分かっています。将来、有人火星探査が行われる際にも、火星の地下氷はとても重要です。飲み水や燃料として利用でき、分解すれば呼吸用の酸素も作れるからです。ただ、地下氷があるのなら



地形の場所は、将来、JAXAが送り込む火星探査の拠点になることでしょう。

研究室の学生と一緒に宇宙の不思議に挑む

ポリゴン地形の研究で活躍した佐古さんのように、長谷川先生の研究室では、所属する学生が非常に大きな役割を担っています。例えば、佐古さんと同じく研究室学生だった鬼頭蓮さんは、長崎大学の実験水槽を用いて、海水準の下降にともなうデルタ（三角州）地形の形態変化を調査。（実験写真参照。実験により再現できたのがおもしろいところ）。この研究から太古火星の海が約32億年前に消失したことや、火星の生命生息可能環境が約21億年前以降も存続していた可能性が示されました。「いろいろなテーマの研究をしているので、学生と一緒じゃないととても手が回らない。これは君に任せた、という感じで取り組んでもらっています。タイタンの研究もそうですね」

タイタンとは土星の周りを回る最大の衛星。メタンが液体で存在し、地表に川の流れや湖が見られ、地球の水循環に似た環境が現存する不思議な星です。このタイタンの研究に取り組んでいるのは「研究者を目指しています」と話す理工学部3年の五郎丸薫平さん。2020年に発表されたタイタンの全球地形図に着目し、新たな視点で表層環境の解明を試みています。

「その全球地形図には、まだ改善の余地があると考えました。人間では地形の識別に主観が入りがちですが、機械学習なら細かな地形の違いをもっと定量的、客観的に整理できるのではないか。そこで、ディープラーニングの最新モデルを駆使して、新たな全球地形図の作成に成功しました」と解説。その成果を国際学会「月・惑星科学会議」などで発表しました。

長谷川先生の研究室では、まだまだ数多くの興味深い研究が行われています。いま進行中で、特に力を入れているのは、火星でかつて存在した生命がいまも生き延びている可能性を探る研究です。「高濃度の塩水なら、低温の環境でも液体状態を保つという報告があります。学生がNASAの火星の画像を徹底的に調べたら、塩湖（塩分濃度の高い湖）が干上がったようなひび割れがあった。火星に今も高濃度の塩水環境が残されていた場合、そこに探査機を持っていったら、顕微鏡で何か動いているものを観察できるかもしれません。もし火星に生命が現存することを証明できれば、科学における今世紀最大級の成果になるのは間違いありません」と長谷川先生は声を弾ませます。

ここ高知県でも、火星につながる研究ができる場所があるそうです。長谷川先生が目をつけているのは、県西南部の土佐清水市竜串海岸。「じつは、火星の地層で見られるのと似ている丸い石（コンクリーション）がいっぱいあるんですよ。初めて見たときはびっくりしました。これを手掛かりに太古火星の生命痕跡の証明に繋げる論文にできないかと、ここ数年考えています」


浅部地下氷を水資源として利用する将来の火星有人探査のイメージ図

どこでもいいわけではなく、探査場所はできるだけ火星の低緯度側が望ましいそうです。

「理由の1つは、低緯度のほうが太陽光線が強く、現地での太陽光発電に都合がいいこと。もう1つは自転速度が速く、地球に帰還する際にロケットを発射しやすいからです」

そこで長谷川先生は、地下氷がある低緯度側の南限を探る研究に取り組みました。着目したのは、冬の凍結と夏の融解が繰り返された結果、地表にひび割れ模様ができる「ポリゴン地形」。「地球の永久凍土の南限とされるモンゴルで現地調査したところ、ポリゴン地形があるところには、地下に氷が豊富にあることがわかりました」

この成果を踏まえて、NASAの探査衛星が撮影した超高解像度の衛星画像を解析。「実際に解析したのは、私の研究室での卒業研究から、共同研究者の所属する岡山大学惑星物質研究所の修士課程まで研究を進めてくれた佐古貴紀君です。すごく熱心な学生で、かつ細かい地形を判別するセンスがありました。この佐古君が2年以上かけて、火星の低緯度側にある地下氷の存在を示すポリゴン地形を見つけてくれました」と長谷川先生。佐古さんが精査した地表画像は全4789枚。発見したポリゴン

長谷川先生が取り組む「新しくて面白い研究」。研究室の熱心な学生を巻き込みながら、これからも続きます。

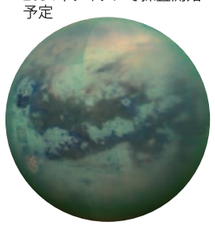


理工学部
地球環境防災学科 准教授
長谷川（はせがわ）　精（ひとし）

東北大学理学部卒業、東京大学理学系研究科博士課程修了。博士（理学）。名古屋大学博物館特任准教授などを経て、2017年、高知大学に講師として着任。2023年より准教授。専門は古気候学・惑星地質学。JAXAの次期火星着陸探査計画の地質班PIとしても活動。「火星探査に関わる30名程の研究者が毎週オンラインで会合し、理学・工学の両視点で探査計画を話し合っています。」

●土星衛星タイタンの着陸調査
2028年打ち上げ予定
2034年タイタンで探査開始予定


ドローンのように飛行するDragonfly 探査機のイメージ図
©NASA/Johns Hopkins APL


NASAの土星探査機カッシーニが撮影した土星の衛星タイタン
©NASA/JPL/UArizona/Uldaho

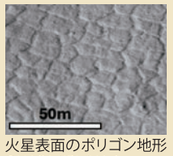

五郎丸 薫平さん

塩水地形 火星の生命調査の鍵？

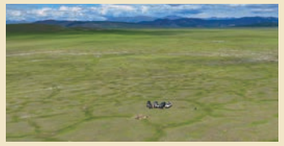

乾燥気候帯の塩湖で見られる、蒸発性ポリゴン地形。塩水が干上がる際に10～20m程のひび割れ地形が形成される。

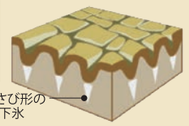
周氷河地形 火星中緯度域に発達する周氷河地形

ポリゴン地形（地下氷で出来る割れ目地形）
永久凍土地帯に広がる周氷河地形の一つ、ポリゴン地形の写真と概念図。くさび状の地下氷が冬季に凍結膨張し、夏季に融解収縮することで、地表に10～20m程の割れ目地形が形成される。



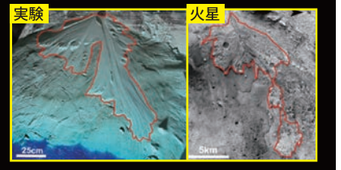
火星表面のポリゴン地形
©NASA/JPL/UArizona


モンゴル北部の永久凍土地帯に見られる、凍土ポリゴン地形



火星のデルタ地形を水槽実験で再現





太古火星の環境変遷史の謎を解明



©MarsTransitionV

高知大学
研究のススメ！

高知大学の研究の「今」をご紹介します。

vol.24

地域の物語を“かたち”にする彫刻研究とデジタルが拓く新しい表現と教育

その手が創り出すのは、のびやかな肢体の女性像、ツインテールをなびかせて躍動する初音ミク、はたまたワイングラスを片手に立つローマ神バッカスのレリーフ…。教育学部の阿部鉄太郎教授は、彫刻家として創作活動を続ける一方で、大学教員として研究や学生教育に携わっています。アートと研究、教育の関係について話を聞きました。




井上ワイナリーのいち醸造所

ワイナリーに溶け込むアート 物語が宿る彫刻作品

太平洋を望む小高い山の上に立つ、高知県香南市の「井上ワイナリーのいち醸造所」。その入り口で来場者を迎えるのが、阿部鉄太郎先生が制作した2点のレリーフです。1点はブドウの木、もう1点は豊穣とワインの神バッカスをモチーフにしています。

「高知大学が、ワイナリーの母体である県内企業の井上石灰工業と包括的連携協力の協定を結んでいたことから、レリーフ制作の依頼を受けました。私は彫刻を制作する実技系の教員なので、作品制作も実践研究のひとつ。また地域と密着した表現を提示することは、学生の教育にも還元できるだろうと考えました」と阿部先生は振り返ります。

2021年から制作を開始。作品が屋外展示になることから、まず現地調査を行いました。展示を行う壁面は石灰で構成されており、強いアルカリ性のため金属は腐食してしまいます。そこでブドウのレリーフはセラミックス、バッカス像はFRP（強化プラスチック）を採用。設置場所の正確な採寸を行ったうえで図案を考えました。


ブドウのレリーフ


バッカス像

加えて、阿部先生は耕作放棄地をブドウ畑として再生し、県内各地で丁寧にブドウを栽培しているワイナリーの取組に着目。ワイナリーで育てているブドウの葉を写生して、品種ごとの特徴を写実的に表現し、また、実際の畑の土を陶土に練り込みました。

「ワインづくりはテロワール、つまり土地の記憶を大切にします。彫刻も同じで、素材に物語が宿ることが重要なんです」と先生は語ります。

当時、コロナ禍のさなかだったことから、自宅アトリエでコツコツと制作。1年後の2022年4月、ワイナリーの入り口を飾ることができました。

SNSやワークショップでアートの力が地域を応援

阿部先生の研究は「つくって終わり」ではありません。高知県の地域文化の振興と活性を促すための彫刻作品の実践的な活用を、研究の柱にしました。実際に行ったのが、SNSでの拡散とワークショップの開催でした。

展示されたレリーフについて、自由に撮影してもOKとし、SNSで発信できるように仕掛けづくり。この試みによって作品の存在が全国に知られ、県外から「SNSで知って、実物を見に来ました」という来訪者も増えています。「彫刻は視認性が高いので、SNSとの相性がいいんです。作品をきっかけに高知を訪れてくれれば、カツオのたたきを食べたり、観光をしたりして、高知の良さを満喫していただける。SNS活用の醍醐味ですね」。

ワークショップでは、ブドウの葉をかたどった陶芸皿の絵付け体験を実施。子どもたちが葉の形の違いに興味を持ち、地域とのつながりの重要性を学ぶなど、文化振興の効果が表れていると、阿部先生は考察しています。




陶芸皿の絵付け体験の様子

「初音ミク」をアートする 現代美術の最前線に臨む

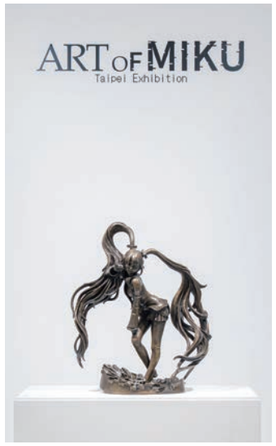
最近は、創作活動の幅が一層広がりを見せている阿部先生。今年8月には、台湾・台北で行われた国際現代美術展「ART OF MIKU Taipei Exhibition」で作品を展示しました。

テーマは、バーチャルシンガー「初音ミク」。現代アーティストが初音ミクをテーマに作品を作成・発表するプロジェクトで、阿部先生はブロンズ像「First Voice」を展示しました。「私はこれまで、理想化された肉体美を解剖学的に、クラシックにとらえるトレーニングを続けてきました。そこで培われた造形の意識を持った者が、フィギュアやアニメを表現するとどのような作品ができるか、とても関心があったんです。実際、今回の展覧会場でも作家たちがサブカルチャーをそれぞれに昇華した作品が並んでいて、実に面白かったですね」と参加の理由を話します。

この作品はつくり方がとてもユニークで、先生が彫刻DXとして県内の鋳造用模型メーカーである高知機型工業と連携して取り組んでいる次世代型彫刻技法によって制作。従来の「粘土→石膏型→鋳造」という工程に代わり、3Dスキャンや3Dプリントを活用しています。

「AIが原型を作る時代に、人の手で作る意味を問い直したい」と先生。いま、粘土で作った原型とAIが生成した3Dモデルを“対決”させる新作にも挑戦中です。


台湾・台北で行われた国際現代美術展「ART OF MIKU－Taipei Exhibition－」



ブロンズ像「First Voice」

「アートと創造性教育」が育むAIと付き合う思考法

作品制作と同じ熱量で、阿部先生は教育にも向き合っています。担当する共通教育科目「アートと創造性教育」では、アニメ制作の実習、井上ワイナリーなど県内アート関連企業の訪問、アニメクリエイターによるワークショップなど、アートと産業をつなぐ体験型プログラムを展開しています。

「アーティストが作品を生み出すときのプロセスや考え方を応用し、自分の目線で新しい価値や課題を発見する“アート思考”を学んでほしい。AI時代といわれる現在、学生たちは当たり前に使っていますが、コスパやタイパを重視するだけでは、深みのある経験にはつながりません。AIと向き合うときに必要な思考法を育むことが目的です」と先生。この科目は全学部の学生が履修できるため、芸術専攻でなくても創造性を磨く機会が得られます。

これから取り組みたいと考えているのは、デンマークのビア大学との学術交流。「ビア大学は、アニメ制作と発表を学習ツールとして用いる教育手法“アニメーテッドラーニング”を提唱し、ヨーロッパで先進的に進めています。すでに教員間の交流を行っていますが、今後は双方の学生が作品を持ち寄る国際交流展覧会を実施したいと思っています」と意気込みます。




アートと創造性教育でのアニメ制作の実習の様子

実習で制作したアニメーション



教育学部
美術教育コース 教授

阿部（あべ）　鉄太郎（てつたろう）

兵庫県出身。岡山大学教育学部卒業。同大学大学院修了、教育学修士。2009年、高知大に着任。2024年より現職。「学生たちは次の日本をつないでいく宝物のような存在。きちんと育てないと、お天道様に『自分さえよければいいっていうやつの作品にオーラが出せるのか』と叱られる気がします」

活躍する高知大学の先輩に
会いにいきました!

HELLO! SENPAI

Vol.12

地域協働学部卒
本山町社会福祉協議会
コミュニティソーシャルワーカー
大久保 琴加さん

地域協働学部での学びと経験を活かし住民に寄り添う



進学先は地域協働学部 この一択で受験勉強に励む

「高知大学での学びが、今の自分をつくっていると感じます。本当に、高知大学に進んで良かった」と笑顔で語る大久保さん。高知県の山里、本山町の社会福祉協議会(社協)の職員として地域を駆け回っています。社協に入って3年目、充実した日々を送る大久保さんに、これまでの経験や地域への思いをお聞きしました。

私は高知県西南部の大月町の出身です。母が介護士をしていて、子どものころ、介護の現場によく連れていってくれました。働く母親の姿がカッコ良く見えて、将来は自分も介護士になりたいな、と何となく思うようになりました。

目指す方向が変わったのは、高校のとき。担任の先生に進路相談をするなかで、じつは介護よりも地域活性化のほうに興味がある ことに気づきました。先生から「それなら、面白い学部があるよ」と教えてもらったのが地域協働学部でした。それから、受験はその一択。この学部が無理やったら、大学は行かんでええ、というくらいの気持ちで受験に臨みました。

コロナ禍を乗り越えて、さまざまなことを経験

念願かなって、大久保さんは地域協働学部に合格。2年生のときから新型コロナウイルス感染症が流行しましたが、それでもできることには何でも挑戦。さまざまな人と出会い、かけがえのない経験をします。

入学する前から、実習がすごく楽しみでした。訪ねたのは大豊町の集落活動センターで、庭園管理をされている地域の方のお手伝いをしたり、人口の少ないところでの集落維持の方法を考え、学んだりしました。実習は3年生までしたが、4年生になっても、もっと大豊町と関わりたいと思い、地域での活動を続けました。

株式会社「里人(さとびと)」での取組も、大きな経験になりました。学部の先輩たちが立ち上げ、朝倉キャンパスの近くでカフェを運営し、大豊町の特産品の発信なども行っていた学生ベンチャー企業です。コロナ禍の混乱した時期で、テイクアウトをどうするかといった試行錯誤もしましたが、とても楽しかったですね。色々なことに挑戦できて、失敗も多かったけど、どれもがいい経験で自信につながったと思います。

充実した大学生活を送る大久保さんも、やがて就職を考える時期に。「もともと社協にも興味があったんですが、他の企業等で経験を積んでからのほうがいいかも」と考え、高知県の工務店を選びました。

建築関係に興味を持ったのは、大豊町で空き家改修の地域活動を経験し、「形に残る居場所をつくりたい」と思ったのが理由でした。しかし、実際に働いてみると、自分の思いと会社の方針等とのズレがあり……。悩んでいたとき、ゼミの先生から連絡をいただき、相談させてもらいました。先生に仕事のことや社協への思いなどを話すと、「先輩が県の社協にいるから、話を聞きにいったらどう?」と言われました。

それからは話がとんとん拍子。先輩からは「あなたには、県の社協よりも、より地域に密着した市町村社協が向いているはず!」とアドバイスを受けました。そのとき、ちょうど本山町の社協が求人を出していて、これはもう運命やなと思って、2024年4月に転職しました。

住民の声を聞き、課題を引き出すのが社協

本山町は人口3千人弱。本山町社協は、この町の全域を13人の職員でカバーしています。大久保さんは事務仕事をしながら、先輩職員と一緒に地域を回り、まずは顔を覚えてもらうことから始めました。

社協に入って1年目は、事務仕事と地域に出るのが半々くらい。2年目からは、住民主体の地域福祉活動計画のサポートなどが担当です。地域の行事や総会に顔を出して、「計画の進捗状況はいかがですか?」「みなさんが考えられた計画、せっかくなので、やってみませんか?」といった声かけをしています。

地域に出ていって、人と話すのが大好きなんです。社協の仕事は、大学時代にやっていたことを継続しているようで、すごく楽しい。顔を覚えてくれると、「こないだ来てくれた社協の人やね」などと声をかけてくれます。そんなことをきっかけに、地域の課題や声が社協に上がってくるようになったらいいな、と思っています。

大久保さんが本山町社協に入って3年目。すっかり地域に溶け込んで、顔なじみもぐっと増えました。いま大事にしていること、これから地域のためにやりたいことは何でしょうか。

地域をよく見ていたら、「こんなふうにしたらいいのに」といったことが浮かんできます。でも、住民さん達自身の想いや、感じること、考えることが最優先です。社協は「地域の黒子」。住民さんがやりたいこと、課題だと思っていることをしっかり聞いて、そのサポートをするのが社協の役割なんです。だからとにかく、住民の皆さんの話、地域の力を引き出すことを心がけています。

また、社協の事業のかなめのひとつが、個別支援です。生きづらさを感じている方にその人に合ったアプローチができるように、専門知識を身につけて、経験も積んでいきたい。個別支援がうまくできれば、それを地域支援にも活かせると思います。そういった意味も含めて、通信教育の専門学校に1年半通い、社会福祉士の国家資格を今年取得しました。これからもっと、「社協人」としての磨きをかけていきたいです。



地域住民へのヒアリング

HELLO! SENPAI

高知大学での経験が大きな力になっている、と実感する大久保さん。高知大学の学生と、これから受験する高校生にメッセージをいただきました。

とにかく、色々なことに挑戦してほしい。今の時代、知らないことはすぐにネットで調べられます。でも、それよりも、できたら実際に経験してほしいです。「百聞は一見に如かず」という言葉がありますが、本当にそう。とりあえず、手を伸ばす、足を突っ込む。こんな感じでやっていたら、失敗しても勉強になるし、人とのつながりもできてきます。社会人になったら、仕事以外で何かをやろうと思っても、なかなか難しい。大学生の今だからこそ、いろいろな経験をしてみてください!





(上)地域での福祉教育の様子
(下)老人クラブの旅行でのひとこま

大切なのは、住民主体の地域づくり。私たちは、地域の黒子ですね。







(上)大豊町東豊永地区での実習の様子
(下)大豊町東豊永地区の子ども達と

大久保琴加(おおくぼことか) さん

高知県大月町出身。2023年、地域協働学部を卒業。「高知が大好きで、県外に出る気はなかった」ことから、県内の一般企業勤務に就職。2024年に本山町社協へ。「社協で働くようになってからすごく楽しそう、環境に恵まれちょるがやね、と母に言われます」

本山町社会福祉協議会

HP　インスタグラム

総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント
出場4年ぶり、全国へ

高知大学サッカー部



応援の力を背中に感じながら みんなでつかんだ全国の舞台

6月20日、令和8年度四国大学サッカートーナメントで優勝を果たしたサッカー部。4年ぶり31回目の、総理大臣杯全日本大学サッカートーナメントへの出場を決めました。大会初戦を目前に控えた8月27日、高知大学サッカー部の主将・森智史さん（教育学部4年）と副将・長尾航太さん（人文社会科学部4年）、監督の宮武敢司さんに話を聞きました。

まず四国トーナメントについて尋ねると、2人は「簡単な試合はひとつもなかったです」と口をそろえます。初戦では前半に得点できない時間が続き、チームに不安が広がりました。準決勝は延長戦までもつれ、緊張感のある展開が続きました。



サッカー部主将 教育学部4年 **森 智史**さん

サッカー部監督 高知大学職員 **宮武 敢司**

サッカー部副将 人文社会科学部4年 **長尾 航太**さん

長尾さんは「もっと点を取れていたら楽な試合になった、と思う場面もありました」と振り返ります。

それでも試合を重ねるごとに修正を積み重ね、練習で描いてきた形で得点できるようになり、それが優勝につながったといいます。森さんは「試合運びや時間帯の使い方など、共有してきたことが自然とできるようになりました」と話しました。宮武監督は今年のチームの強さについて「ポゼッションやハイプレスを軸にしながらも、状況に応じて戦い方を変えられる柔軟さがある」と評価します。



決勝戦では後半20分、仲間の得点で全国行きを決めました。多くの部員が応援に駆けつけていて、まるでホームのような雰囲気だったといいます。森さんは「家族や後輩が応援に来てくれて、みんなで勝ち取った全国です」と感謝を述べました。長尾さんも「支えてくれている人の存在を強く感じました」と笑顔を見せました。

全国大会初戦は9月2日。森さんは「自分たちの色を出しながら、状況に応じて戦い方を変えることが大事」と話します。高知大の“色”とは、ボールを大切にし、前から積極的に守備を仕掛けるスタイル。長尾さんは「自分の得点でチームを勝利に導きたい。失点しないことを徹底し、流れが来た時に決め切る」と意気込みます。

全国大会のあとは、冬に行われる全日本大学サッカー選手権大会出場のためのリーグ戦が控えています。「四国で一番を当たり前にし、全国を戦いの場にしたい」。森さんの言葉は、これからの高知大学サッカー部の未来を力強く示しています。

全国大会に出場し健闘しましたが、悔しい敗戦となりました

総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント

試合結果：1回戦

高知大学 0－5 福岡大学

〈森さん〉パス、シュート、球際など全てにおいて差を感じました。もう一度全国の大会でチャレンジするために後期の試合死物狂いで闘い抜きたいと思います。

〈長尾さん〉負けてしまったこと、攻撃の選手として、得点することができなかったこと、とても悔しいです。チーム、個人として、出来たこと出来なかった事を前向きに捉えながら、後期のリーグ戦に挑みたいです。



よさこい高知文化祭×高知大学

ユニークな土佐弁の魅力を県内外に発信

高知県では2026年10月25日から12月6日まで、国内最大級の文化の祭典「よさこい高知文化祭2026」を開催。高知大学はこの一大イベントに協働、「土佐弁」を通じて県内外の人たちと交流し、魅力を発信しています。



一番、土佐弁らしいのはどれ？ アンケートで問いかけ

「よさこい高知文化祭2026」に協働したのは、大学院教職実践高度化専攻の岩城裕之教授。方言学が専門で、「土佐弁は全国的に見てもユニークな方言です。古い言葉がたくさん残っていて、『こじゃんと』などの個性的な副詞も多いんですよ」と解説します。

全国から集まる人たちに向けて、この個性あふれる土佐弁を発信したいと、文化祭の高知市実行委員会が岩城先生に働きかけ、取組がスタートしました。学校現場と協働し、若い人たちも巻き込んで盛り上げようとの狙いから、高知県立高知小津高校の生徒、高知大学や高知県立大学の学生らと連携。どのように発信すれば興味を持ってもらえるのか、企画を練っていきました。

「毎週、高知小津高校に出向いて、高校生たちと考えを出し合いました。当初はクイズ大会などの案も出ましたが、それでは1日で終わってしまうし、成果を形で残せない。そこで、土佐弁に関するアンケートを行い、その結果をグッズにして配ろうということになりました」と岩城先生は話します。





「イチ押し土佐弁」をクリアファイルに記して配布

まずは、アンケートの内容を詰めていきました。土佐弁に関する複数の辞典をチェック。どの辞典にも掲載されている24の特徴的な単語を抜き出して、「土佐を感じる方言は？」と県内外の人に問いかける形にしました。アンケートで取り上げたのは、「いごっそう（頑固者）」「こじゃんと（とても、たくさん）」「まける（こぼれる）」「ちゃがまる（止まる、故障する）」「りぐる（こだわる）」といった、いかにも土佐弁らしい単語ばかり。このアンケートを高知市役所や高知市文化プラザかるぽーと、日本最大級の街路市である日曜市などで配布し、計300名以上に記入してもらいました。

「アンケートを持って、教育学部の学生たちといっしょに、高知大学近くの居酒屋に出かけたりもしました。色々やってみて、改めて感じたのは、高知の人はやっぱり土佐弁が好きなんだな、ということ。居酒屋のお客さんなんか、「あの言葉が入っていない」「これはもう使わんねえ」などと、とても盛り上がっていました」と岩城先生は笑います。

アンケートを回収後、結果を集計し、「高知県民が選んだイチ押し土佐弁」「県外の人が選んだイチ押し土佐弁」を印刷したクリアファイルを制作。岩城先生による土佐弁の解説や、「ぜよ」が有名になった理由を解き明かすコラムを掲載したパンフレットも併せて制作し、ともに文化祭の会場などで配布しています。

「クリアファイルをメインにしたのは、比較的、手元に長く置かれることが多いからです。文化祭に来られた県外の人が入手し、地元に持って帰って、土佐弁をネタに色々話をしてもらいたい。また、自分たちの方言についても考えてもらえたら、とてもうれしいですね」と岩城先生は今回の取組への思いを語ります。





（上）日曜市でのアンケートの様子。県内外の方に気になる土佐弁に投票をしてもらう。（右）よさこい高知文化祭で配布したクリアファイル。県内外や高校生の気になる土佐弁1位が判明。



かるぽーとでの展示の様子

総合人間自然科学研究科 教職実践高度化専攻 教授

岩城（いわき） 裕之（ひろゆき）

広島県出身。広島大学教育学部卒業、同大学大学院文学研究科博士課程修了、博士（文学）。2014年、高知大学に着任。方言学、国語科教育などが専門。「じつは、『ぜよ』はいまの高知ではあまり使われていません。ぐっと有名になったのは、NHK大河ドラマの『龍馬伝』からでは？ある意味、龍馬語といったイメージですね（笑）」



国内最大級の文化の祭典

よさこい高知文化祭2026について詳しくはこちら

よさこい高知文化祭2026

高知大学のネーミングライツ 実施事業者が決定しました

この度、朝倉キャンパスに所在する2つの施設について、学内の審査を経て、ネーミングライツ実施事業者が以下のとおり決定しました。本学としては、初のネーミングライツ導入事例となります。

実施事業者：ニッポン高度紙工業株式会社
対象施設：学術情報基盤図書館（中央館）2階アクティブラーニングスペース
愛　　称：KODOSHI Learning Space
契約期間：2026年８月１日～2029年７月31日

実施事業者：株式会社高知電子計算センター
対象施設：共通教育210番教室
愛　　称：高知電子計算センターCreative Classroom
契約期間：2026年９月１日～2031年３月31日



KODOSHI Learning Space


高知電子計算センターCreative Classroom

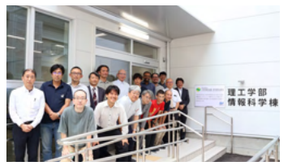
オープンキャンパスにて理工学部の 新たな教育・研究拠点「情報科学棟東館」をお披露目

本学の大学院総合人間自然科学研究科理工学専攻は、文部科学省「大学・高専機能強化支援事業」に採択され、10年間で総額約7.6億円の支援を受け、事業を推進しています。

2024年度には、「情報科学・データサイエンス・DX教育プログラム（以下、IDD教育プログラム）」を立ち上げ、デジタル分野を牽引する高度情報専門人材の育成と教育・研究環境の整備を進めてきました。その一環として整備を進めてきた理工学部の新たな教育・研究拠点「情報科学棟東館」が、2026年3月に完成しました。

2026年8月1日に開催されたオープンキャンパスでは、情報科学棟東館において情報科学科の研究室紹介展示を実施し、大学施設見学ツアーの見学コースにも組み込まれ、多くの高校生や保護者の皆様にご来場いただきました。学科別企画では、情報科学科の各研究室が研究内容や教育活動を紹介し、教員や学生との交流を通じて、本学における情報科学分野の学びや研究の魅力を伝えました。来場者は、新しい教育・研究環境や最新設備に高い関心を寄せるとともに、展示や教員・学生による説明に熱心に耳を傾ける姿が見られ、会場は終日、多くの高校生や保護者で賑わいました。また、イベント終了後には、情報科学棟東館の完成を記念し、IDD教育プログラムに参画する理工学部の教員が記念写真の撮影を行いました。

今後も、理工学部・大学院総合人間自然科学研究科理工学専攻では、情報科学棟東館を拠点としてIDD教育プログラムを推進するとともに、情報科学分野における教育・研究環境のさらなる充実を図り、地域や社会のデジタル化を支える高度情報専門人材の育成に取り組んでまいります。



高知大学、コー・イノベーション大学及び 須崎市が連携協力協定を締結

2026年8月3日（月）、国立大学法人高知大学、コー・イノベーション大学（以下「CoIU」）及び須崎市は、連携協力に関する協定を締結し、同日、協定締結式を執り行いました。

本協定は、高知県域及びCoIUのサテライトキャンパス所在地域における社会課題に対し、理論・実践・対話を重視する「共創（Co-Innovation）型」のアプローチを通じて、地域の新たな価値創造を担う人材を育成することを目的としています。

当日は、本学の受田浩之学長、学校法人CoIUの井上博成理事長及び須崎市の楠瀬耕作市長が出席し、協定書への署名を行いました。会見では、本協定が単なる二者間協定にとどまるものではなく、三者が連携することで、地域と学びが循環する仕組みを構築し、新たな価値創造につながる人材育成を推進していくことが説明されました。

受田学長は、今回の連携協定について「三者の絆を礎に、学生や社会人とともに価値を実装し、社会に対して真の貢献ができるよう努力していきたい」と今後の抱負を述べました。 本学は、本協定を通じて地域社会及び関係機関との連携を一層深め、それぞれの強みを生かした共創の場の創出を進めてまいります。また、これまで培ってきた地域協働型教育の知見を活用しながら、高知から新たな価値創造を発信し、地域社会の持続的な発展に貢献してまいります。

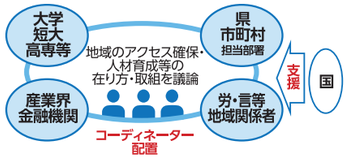


文部科学省「地域構想推進プラットフォーム」 構築等推進事業に採択されました

文部科学省の「地域構想推進プラットフォーム」構築等推進事業（以下、本事業）において、本学が申請した「『高知県版地域構想推進プラットフォーム』（仮称）による地域人材育成エコシステムの形成」（受田浩之高知大学長、濵田省司高知県知事両名が事業責任者）が採択されました。本事業には全国から37件の申請があり、本学を含む20件が採択されています。

本事業は、2040年における各地域の社会や産業のあるべき姿を見据え、高等教育機関の長、地方公共団体の長、地域産業界等の代表者をはじめ、地域の産学官が様々なレベルで緊密に連携し、各地域の人材需要や産業界等のニーズを共有しながら、高校改革と連動した高等教育改革をはじめ、地域ニーズを踏まえた人材育成方策を協議・実行するための「地域構想推進プラットフォーム」を構築することを目的としています。

本事業を活用し、高知県が令和7年に設置した「若者応援産学官フォーラム」を「高知県版地域構想推進プラットフォーム」（仮称）として位置づけ、「2040年の高知県の労働需給ギャップ調査」の実施と結果の活用、分野ごとのコーディネーターの活用等によって、行政、高等教育機関、産業界、金融機関等が一致団結して連携し、高知県が将来にわたり持続可能な地域となるよう、2040年の社会を見据えた地域の人材育成に関する議論と取組の実装を行い、さらに、コーディネーター養成や高知県産学官民連携センターの活用等継続の仕組みも議論し、自走できる地域人材育成エコシステムの形成を目指してまいります。



入試・イベント情報

「出願直前！オンライン学部説明会・個別相談会」開催！

出願にそなえて、高知大学の学部・学科の概要やキャンパスライフについて聞いてみよう！

■【学部説明会】

教員や在学生から、
学部で学べる内容を説明します。
受験生の方の質問にもお答えします！

2027年 1月25日（月）～27日（水）（予定）
（各学部のスケジュールなどの詳細はHPをご覧ください）



■【個別相談会】

アドミッション担当職員が、
受験に向けてのお悩みなど
個別のご相談に対応します。

2027年
1月27日（水）～29日（金）
16:00～19:00 の間
各回15分程度



お申し込みは受験生サイトから　進学相談会 高知大学

高知大学医学部附属病院DMAT、 熊本地震で迅速な支援活動を展開

熊本地震に派遣された 高知大学医学部附属病院DMAT

2026年7月28日、熊本県で最大震度7を観測する大規模地震が発生。被災地では水や電気の途絶、医療機関の機能低下、避難所の環境悪化などが同時に起こり、早期の医療支援が求められました。高知大学医学部附属病院は医師・看護師ら6名でチームを編成。7月30日の朝にはDMATカーと救急車の2台で熊本へ向かい、8月4日まで支援活動を行いました。



高知大学医学部附属病院のDMATカーと救急車

今回、DMAT隊員として活動に参加した竹内慎哉医師は「地震の規模から、支援依頼が来る可能性が考えられました。そこで地震が起こった当日に、院内のDMAT隊員が集まり、必要な物資や人員の調整を始めました」と振り返ります。

DMATは、発災48時間以内に活動できる医療者を確保するために整備された国の制度で、阪神・淡路大震災を契機に創設されました。竹内医師は「DMATは“何でもします”という姿勢で活動するチームです。医療行為だけでなく、物資運搬や避難所支援、時にはトイレ掃除まで行います」と語り、災害時の多様な課題に対応する柔軟性が特徴だと説明します。

熊本地震での活動と見えてきた課題

医学部附属病院DMATは、宇城市、宇土市、御船町などのエリアを担当しました。主な役割は、地域の診療所や福祉施設、避難所の状況を把握し、必要な支援を調整する「被災地域支援班」です。

「医療機関の場所もわからないので、まずは地図上でマッピングするところから始めました。現場の医師会や自治体と連携しながら、クリニックや薬局、福祉施設に電話や訪問で状況を確認しました」と竹内医師。水・電気・人員など“今一番必要なもの”を聞き取り、物資班に水の供給を依頼したり、避難所に段ボールベッドを届けたり、施設の片付け支援を調整したりと、幅広い支援を行いました。


被災地域支援班の様子



赤枠内が担当エリア



「以前、支援活動を行った2024年の能登半島地震では寒さがリスクになりました。今回の熊本地震では暑さが最大の課題で、熱中症リスクが高まっていました。水不足はどの災害でも共通して深刻です」と竹内医師は語ります。

また、支援には組織間の連携が不可欠であることも痛感したといいます。「医師会、歯科医師会、市町村、保健所など、普段から連携体制を整えておくことが重要です。情報が錯綜する中で、連携が支援の質を左右します」。さらに、被災地外の施設でも職員の家族が被災している場合、勤務が困難となり支援が必要になるケースがあることも新たな気づきでした。

竹内医師は「災害は、ひとつとして同じものはありません。だからこそ、さまざまな想定を考え、備えておくことが大切で、それは南海トラフ地震にも言えることです」と話します。高知県が直面する可能性のある南海トラフ巨大地震では、高知県外からのアクセスが難しいために、支援がすぐには来ない可能性が高い、だから「支援は2～3日来ない」という想定で、政府主導の訓練が行われるそうです。

「熊本での支援活動は、移動をのぞいて実質3日間。もう少し活動を続けたいと、後ろ髪ひかれる思いだったのが、多くの隊員の気持ちです。しかし支援が長引けば、高知の医療体制に負担がかかることになる」と竹内医師。災害時の医療現場で、命を救うためのさまざまな活動を行うDMAT。これからも、その活躍が期待されます。



（左）活動を終え帰任したDMAT隊
（右）活動報告会の様子

いつか来る 南海トラフ地震への備え 私たちができること

医学部
災害・救急医療学講座 助教
竹内（たけうち）　慎哉（しんや）



「まずは、自分たちが生き延びるための備蓄をしっかり整えておくことが大切です。一般的には3日分と言われますが、実際には1週間分を備えておくといいでしょう。また、津波の危険がある地域では、“とにかく早く高い場所へ逃げる”ことが命を守る最優先になります。どうか最後まであきらめずに、生き延びる気持ちを持ってください。よくいる場所から高台まで何分で行けるのか、日頃から確認しておくことが重要です。地域の防災訓練に参加することで、避難経路や地域の弱点が見えてきます。災害は必ずしも同じ形で起こりませんが、備えておくことで助かる命は確実に増えると感じています」